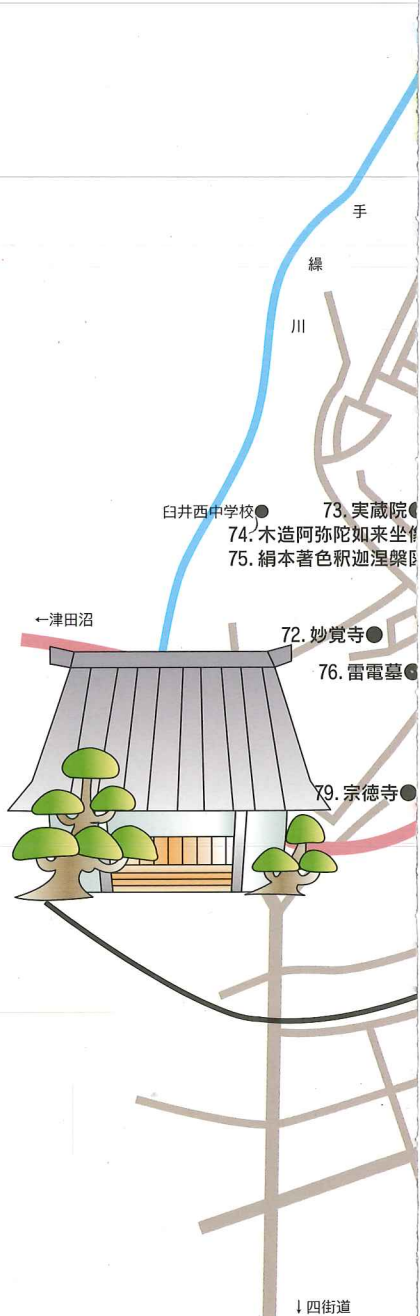
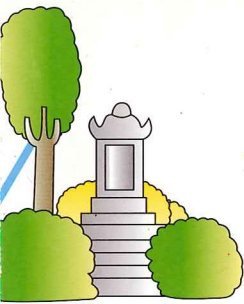


臼井城下から「成田道」の宿場

# 【臼井地区】

- 65. 臼井城跡(臼井)……………66
- 66. 太田図書墓(臼井)……………66
- 67. 臼井八幡社(八幡台)……………67
- 68. 川口宗重墓(八幡台)……………67
- 69. 臼井台稲荷神社のカヤ(八幡台)…68
- 70. 阿多津の祠(臼井田)……………68
- 71. 円応寺(臼井田)……………69
- 72. 妙覚寺(臼井台)……………69
- 73. 実蔵院(臼井台)……………70
- 74. 木造阿弥陀如来坐像(臼井台)……70
- 75. 絹本著色釈迦涅槃図(臼井台)……71
- 76. 雷電墓(臼井台)……………71
- 77. 道誉上人墓(臼井台)……………72
- 78. 長源寺(臼井田)……………72
- 79. 宗徳寺(臼井田)……………73
- 80. 成田道道標(臼井)……………73
- 81. 光勝寺(臼井)……………74
- 82. 江原刑場跡(江原台)……………74
- 83. 江原台遺跡(江原台)……………75







65

## うすいじょうあと 白井城跡



白井城跡は、白井氏によって築かれたといわれますが、16世紀中頃には原氏が白井城主となります。戦国時代に原氏は、千葉氏をも凌ぐ勢力となり、永禄9年(1566)には上杉謙信の白井城攻撃を撃退しています。しかし、天正18年(1590)7月に原氏は北条氏とともに滅亡し、翌8月には白井城に徳川家康の家臣酒井家次が入城します。慶長9年(1604)12月に家次が上野国高崎に転封されると白井城は廃城となりました。

白井城は、「城ノ内」と呼ばれる区画が城の中心となり、この部分から多くの陶磁器が出土しています。その前面には「御中城」と呼ばれる区画があり、この2つの区画が白井城の中核と考えられます。これらの区画の周辺には、家臣屋敷や寺社が設けられていましたが、その外側を土塁や堀によって区画することによって、城内に取り込んでいったと推定されます。現在「大名宿」「外城」「寺台」などの地名が残されています。



66

## おおたずしよはか 太田図書墓

おおたずしよのすけすけただ  
太田図書助資忠は、関東管領扇谷上杉氏の家臣太田道灌の甥です。白井城跡の傍らにある石碑は、白井城の合戦にて討死した太田図書の墓と伝えられています。石碑そのものは、当時のものではありませんが、白井城における戦いを今に伝えるものです。

当時、関東は古河公方足利氏と関東管領上杉氏が対立しており、千葉氏一族もこの両派に分かれていました。

文明11年(1479)上杉方の太田資忠らの軍勢が、足利方の千葉孝胤らが籠もる白井城を包囲し、周辺の敵対する諸城を攻略します。しかし、白井城の防備は堅固であり、落城する気配がありませんでした。そのため、資忠らは一旦兵を引き上げようとしたところ、城内から兵が討って出て来ました。これに対して上杉方も反撃を加え、ついに白井城を落城させました。けれども、この戦いにおいて、資忠をはじめとする多くの上杉方の武将も戦死しました。





## うすいはちまんしゃ 臼井八幡社



八幡台二丁目にある八幡社は、暦応元年(1338)に臼井興胤<sup>おきたね</sup>によって創建されたと伝えられています。祭神は菅田別命<sup>ほんだわりのみこと</sup>(応神天皇)です。その縁起によれば、臼井興胤が足利尊氏にしたがって九州を転戦し、延元元年(1336)に筑前国多々羅浜(福岡県)で菊池武時と戦う前に、宇佐八幡に祈念したところ、合戦に大勝したことから、自分の領地である臼井に宇佐八幡を勧請し祭ったといわれます。また、境内の天満宮も同じ時に太宰府天満宮から勧請したものと伝えられています。

時代が降って江戸時代になると、臼井の領主であった旗本川口氏が、この神社を崇敬し、様々な寄進をしました。

江戸時代の臼井八幡社の境内には、大きな楠がありました。この楠は、臼井興胤が九州の宇佐八幡から持ち帰って植えられたと伝えられ、成田街道の名物の一つでした。しかし、現在では枯死し4mほど残された木が、御神木として保存されています。

## かわぐちむねしげはか 川口宗重墓

八幡台一号公園の隣地にあるこの墓は、臼井を領していた川口宗重のもので、川口氏は戦国時代に織田氏に仕えていましたが、宗勝の代に関ヶ原の戦いにおいて西軍に付き、一時伊達政宗に預けられました。その後、二代将軍秀忠の御家人となり、慶長10年(1605)印旛・葛飾両郡内にて2500石を知行しました。

宗重は宗勝の三男で、慶長17年(1612)に父の遺領の内、葛飾郡臼井500石を継承しました。後には上総国・甲斐国内に加増され、都合2000石を知行しましたが、承応3年(1654)6月17日に68歳で死去しました。

大塚山(八幡台三丁目)の墳墓から現在地に移されたこの墓石には、次のように刻まれています。

- (正面) 為 照院釋道是善根菩提也  
南無阿弥陀仏  
茲時承応三甲午歳林鐘十七日
- (左面) 川口茂右衛門尉  
平宗重六十八歳逝去
- (背面) 唯独自明了
- (右面) 川口作左右門尉平宗忠  
廿七歳建立之孝子敬白





69

## うすいだいいなりじんじゃ 白井台稻荷神社 のカヤ



カヤは暖かい地方にみられるイチイ科カヤ属の常緑高木で、雌雄異株です。カヤには特有の香気があり、実から油をしぼったり、菓子の原料として炒って食べたり、薬用としても使用されます。

この稻荷神社の御神木のカヤは、印旛沼を望む台地上の八幡台一号公園の隣地にあります。周辺の宅地造成のため、周辺の地面より7～8mも低くなった部分にあります。シイ、ムク、ケヤキなどの大樹とともに良好に保存されています。この木は、高さ15m、目通り幹5mの雄株です。

老樹のため樹皮は剥離し、幹には数か所の空洞が見られますが、樹勢はいまなお旺盛です。地上3mほどのところで幹枝を4本に分離させており、そのうち1本は大正年間の神社の火事で損傷したためか枯死しています。

八幡台1-1



70

## お た つ ほ こ ら 阿多津の祠

白井城跡から東南へ500mほど行ったところに、江戸時代の延享4年（1747）に造立された石祠があります。これを地元では、「おたつ様」と呼んでいます。

昔白井城主であった白井祐胤<sup>すけたね</sup>の死後、後見人の叔父志津胤氏<sup>ななつし</sup>によって、幼少の竹若丸の殺害が企てられた時、乳母阿多津が竹若丸を助けて鎌倉に逃しました。しかし、阿多津自身は、胤氏の配下の者に追われ、印旛沼のほとりの葦原に一時隠れましたが、咳をじたために捕らわれて殺害されてしまいました。村人はこれを哀れみ、祠を建立し阿多津を祀ったといえます。ここに麦こがしとお茶を供えてお願いをすれば、咳が治るといわれました。このことから、阿多津の祠はやがて咳神と呼ばれるようになり、今もその信仰が伝えられています。

このような咳の神様は各地にあり、「しゃびき婆さん」「ちゃぼこ婆さん」などと呼ばれ、市内大蛇町の「粟切り婆さん」も阿多津の伝説に類したものです。







71

## えんのうじ 円応寺



白井田にある瑞湖山円応寺は、釈迦牟尼仏を本尊とする臨済宗妙心寺派の寺院です。江戸時代には幕府から寺領20石を与えられました。また塔頭として妙蔵院（白井田）・松雲寺（八幡台）など3か寺、末寺として宝樹院（上座）・報恩寺（下志津）・雲祥寺（先崎）・西福寺（印旛村岩戸）・常安寺（飯野）・円通寺（角来）・浄光寺（羽鳥）・清久寺（四街道市亀崎）・小林寺（吉見）など10か寺がありました。

円応寺所蔵の「円応寺草創記」によれば、暦応元年（延元3年、1338）に白井氏中興の祖である白井興胤おきたわにより創建されたとされます。開山は竹若丸（のちの興胤）を養育した鎌倉建長寺の仏国禅師とならび、陰で白井家の再興を支えた仏真禅師で、師の恩に報いたものです。以来、白井氏の菩提寺として崇敬されてきました。

このように創建当初は、鎌倉建長寺派であったものを19世頂山禅師の代に妙心寺派に転派し現在に至ります。

円応寺は、文禄2年（1593）酒井家次が白井に居城のとき城とともに焼失したものをのちに再建したものです。

寺領は広く、風光明媚で知られ、白井城跡とともに「城嶺夕照」として白井八景のひとつに数えられました。境内には美しく整えられた庭園があります。



72

## みょうかくじ 妙覚寺

白井台にある長谷山妙覚寺は、釈迦如来を本尊とする日蓮宗の寺院です。長享2年（1488）の創建とされ、開山は日泰上人と伝えられます。本行寺（千葉市中央区浜野町）の末寺でした。

日泰上人は、奈良や比叡山に学び、後に関東へ下って布教を続け、下総国浜野に本行寺を、ここ白井の地に妙覚寺を開山しました。上人の活動では、土気、東金城主の酒井定隆を教化し、領内を法華宗に改宗させたという、いわゆる「七里法華」が房総の仏教史上特筆されます。

明治28年（1895）には布田（東金市）の不老山薬王寺から布田薬師を勧請し、同薬師の目薬を取り扱うようになってからは、眼の病に靈験があるとして近隣の人々から「薬師様」として親しまれ、縁日にはたいへん賑わったといえます。

また、境内には佐倉・雷電顕彰会によって建立された江戸時代後期の力士雷電為右衛門の顕彰碑があります。





73

## じつぞういん 実蔵院



白井台にある大沢山実蔵院は、不動明王を本尊とする真言宗豊山派の寺院です。創建年代については不明です。長谷寺の末寺でした。

寺宝の木造阿弥陀如来坐像と絹本着色釈迦涅槃図は、市指定有形文化財です。

また、実蔵院には明治36年（1903）から昭和17年（1942）まで私立明倫中学が開かれ、地域の教育に貢献しました。

松虫寺（印旛村松虫）、結縁寺（印西市結縁寺）、満蔵寺（八幡台）、徳性院（印旛村瀬戸）、円福寺（四街道市物井）が末寺であり、宝蔵院（物井）、宝積院（物井）、東福院（飯重）、成就院（飯重）、常宝寺（瀬戸）、常泉院（角来）、長円寺（印旛村師戸）、林光院（四街道市亀崎）、西光院（四街道市内黒田）、慈眼寺（八幡台）、常福寺（四街道市山梨）、千蔵寺（馬渡）、常楽寺（白井田）、光明寺（白井）、不動院（白井）が門徒でした。



74

## もくぞうあみだによらいざぞう 木造阿弥陀如来坐像

白井台の大沢山実蔵院の木造阿弥陀如来坐像は、高さ55.5cmの檜材の寄木造です。眉間<sup>ひまぐら</sup>にあつて光明を放つ雪白の白毛を表わす白毫を、水晶で表現しています。また、頭上に肉が隆起して髻の形をしていることを表わした肉髻珠<sup>にくびしゆ</sup>は欠いています。頭髪は仏像彫刻に見られる螺髪とは異なり、縄を巻いたような形をしています。このような頭髪は清涼寺式といわれる仏像に見られるものです。このような頭髪の仏像は、印旛沼周辺に散在し、佐倉市内の畔田正光寺の木造薬師如来像・寺崎密蔵院の薬師如来像も同様の頭髪です。

髪<sup>かみ</sup>の生え際の線が、額中央から少し垂れて波形をなしています。さらに、頬のふくらみや胸から腹部は写実的です。衣文の流れも滑らかですが、幾分低めの膝高や肩あがりに感じる木造りから、鎌倉時代末期の仏像と考えられています。光背・台座等は後世に補われています。像背面には「恵心直作浮木弥陀」という金泥による後世の書もあります。







75

# けんぼんちやくしよくしやくかねはんず 絹本著色釈迦涅槃図



この図は白井台の大沢山実藏院に伝えられたものです。釈迦涅槃図は、釈迦が入滅した時の様子を描いており、古くから諸寺院の涅槃会の本尊として祀られています。古代から平安時代に製作された釈迦涅槃図の遺作は幾本もありますが、鎌倉時代以降、日本化が著しく進行した釈迦涅槃図はおびただしい数が製作されています。この図も、鎌倉時代以降に整えられた涅槃図の書き方がなされています。このような涅槃図の表現方法は、近世には一般的なものです。

しかし、この涅槃図の軸木には享保14年(1729)という製作年代と「中西甚兵衛」という作者名が記されています。さらに、文化2年(1805)に修理がなされていることも記されています。このように、製作された年代や作者がわかる涅槃図は、貴重な例といえます。この図は、佐倉市の文化史における資料的価値が高いものです。



76

# らいでんはか 雷電墓

顕本法華宗本覚山浄行寺跡の杉山家墓地にあります。明和4年(1767)に信濃国小県郡大石村(長野県東部町滋野大石)で生まれた雷電らいでんが右衛門みぎもんは、天明4年(1784)に伊勢ノ海部屋谷風たにかぜ梶かじの助のすけ(西の大関)の内弟子、天明8年に出雲国松江藩主松平治郷のお抱え力士となりました。初土俵を踏んだのは寛政2年(1790)で、寛政7年には大関に昇進しています。雷電は引退する文化8年(1811)までの35場所、総取組数285で勝ち254、負け10、引分け2、預かり14、無勝負5、休み30の成績を残しています。

享和元年(1801)2月には雷電が白井宿で相撲の5日間興業をおこない、入場券を30両で売り切っています。興業の元方(勧進元)は忠八、世話人は平次でした。雷電の妻八重(前名おはん)は、白井上宿で「天狗茶屋」という屋号の甘酒茶屋を営んでいた忠八のひとり娘でした。墓石の正面に「雷聲院釋闍高為輪信士」(雷電、宗旨真宗)・「聲竟院妙閑日為信女」(八重、宗旨法華宗)、右側面に「釋理暁童女」(娘)、左側面に「俗名 雲州雷電為右衛門源為義 施主飯田忠八」と刻まれています。娘は寛政10年7月8日、雷電は文政8年(1825)2月11日、八重は文政10年1月20日に死去しました。







77

## どうよしようにんはか 道誉上人墓



うすい だ じょうど りゅうがさわ ちょうげん  
白井田の浄土宗龍沢山長源寺墓地に道誉上人の五輪塔と無縫塔があります。

道誉貞把は、和泉国日根郡鳥取庄（大阪府）で永正12年（1515）に生まれ、13歳で出家して享祿4年（1531）には関東へ下り、武蔵国の三縁山増上寺で修業しました。その後、故郷での説法に失敗した道誉貞把は、再び関東に下り、その途中、かねてから靈験あらたかであることを知っていた成田山不動尊で21日間の断食をしました。

天文20年（1551）になると下総国生実（千葉市中央区生実町）城主原胤清（？～1556）の招きにより龍沢山玄忠院大巖寺（千葉市中央区大巖寺町）の開山となり、さらに弘治元年（1555）に増上寺9世の貫主となりました。元龜元年（1570）12月には白井城下に龍沢山玄忠院新大巖寺（長源寺）を開山し、天正2年（1574）12月7日に60歳で死去しました。なお、五輪塔は戦国時代末期の造立ですが、無縫塔は江戸時代の天保3年（1832）に造立されたものです。

この道誉上人墓は、戦国時代末期の白井地方の寺院史を考える上で貴重です。墓の傍らに昔は大きな杉があり、長源寺山の杉といわれていました。



78

## ちょうげんじ 長源寺

うすい だ りゅうがさわ あみだにょらい  
白井田にある龍沢山長源寺は、阿弥陀如来を本尊とする浄土宗の寺院です。龍沢山玄忠院大巖寺（千葉市中央区大巖寺町）の末寺でした。関東十八檀林のひとつ大巖寺は境内の龍ヶ沢に因み龍沢道場とも称しました。

天文19年（1550）12月から白井城主にあった原胤貞が永祿12年（1569）5月に死去すると、胤貞の子で下総国生実（千葉市中央区生実町）城主にあった原胤榮（1551～89）が、翌元龜元年（1570）に白井城へ移りました。長源寺は、この年の12月に胤榮が道誉上人（1515～74）を開山として招き、白井城下の長源寺山（台地先端は白井田宿内砦跡）に創建した寺院で、のち山裾の現在地に移されました。はじめは龍沢山玄忠院新大巖寺と号していましたが、寛永年間（1624～44）に長源寺と改められました。





79

## そうとくじ 宗徳寺



白井台にある<sup>ながや</sup>長谷山宗徳寺は、般若船観世音菩薩を本尊とする曹洞宗の寺院です。

白井氏のあとに白井城主となった原氏の菩提寺で、応永10年（1403）に小弓城主原胤高により下総国小弓郷柏崎に創建されました。

宗徳寺は元亀元年（1570）に原胤榮が白井城主となって以後のある時期、白井城の周囲に配置されていた砦のひとつである手繰砦の麓、長谷津（南白井台）に移転され、この地にあった長谷山龍雲寺を合併しました。宗徳寺が長谷津にあった当時には、大樹に囲まれた昼なお暗い境内のため日陰寺と称されたといわれます。

また、宗徳寺の「権現水」という清水は、昔この地に徳川家康が狩に訪れた際この水を賞味し、寺領10石を賜ったことに由来する名であると伝えられます。宗徳寺は陸奥国の永徳寺の末寺でした。



80

## なりたみちどうひょう 成田道道標

旧白井田宿を過ぎて佐倉方面へ向かい、京成電鉄の踏切を渡ると正面に見える道標が、成田山参詣の人々が利用した道標です。

江戸時代に、成田山新勝寺への人々の参詣が盛んになり、旅人の往来もしきりになったことから立てられたのがこの道標で、正面には「西江戸道」、右側面に「南飯重生ヶ谷道」、左側面に「東成田道」、裏面に「文化三丙寅（1806）仲秋吉日」と刻まれています。その他の刻まれた銘文から、建立者は江戸品川新宿二丁目の油屋庄次郎ほか13名であることがわかります。

このような道標は成田街道の各所に見られますが、道標を見る時に当時の旅人の様子に思いを馳せることができます。







81

## こうしょうじ 光勝寺



白井にある白井山光勝寺は、阿弥陀如来を本尊とする時宗の寺院です。相模国の清浄光寺の末寺でした。

白井氏一族の初期の頃の菩提寺として崇敬されてきたものを、白井城主白井祐胤が相模国藤沢の遊行寺二世真教上人が当地を廻国した際に、真言宗から時宗に改宗したと伝えられます。しかし、白井祐胤の子興胤が臨済宗の円応寺を創建して菩提寺としたため、しだいに衰えていきました。

光勝寺には、本尊のほか印旛沼に流れ着いた首を合わせて体を造ったといわれる、嘉永元年（1848）に完成した閻魔大王の木像があります。

光勝寺は天正18年（1590）に白井城が落城した後、道場作の地から現在地に移りました。この台地からは印旛沼が望め、白井八景のひとつ「光勝晩鐘」に数えられ、景勝地として知られました。



82

## えばらけいじょうあと 江原刑場跡

国道296号線を白井から佐倉方面へ向かうと八丁坂に至ります。坂をのぼっていくと左手に、「南無妙法蓮華経」の髷題目を棹石に大きく深く刻み、台石に「法界」「講中」と刻んだ供養塔があります。これは寛政8年（1796）9月に法華宗の題目講中により造立されたものです。成田道の道筋に面したここは佐倉城の西端にあたり八町森と呼ばれ、佐倉藩が罪人の処刑を行った刑場跡です。八丁坂の途中に木戸を設け、その先に見せしめの場である刑場をおき、さらにその先には「江戸口」と称する方形に巡らせた枅形土手を築いてその中に成田道を通し、その先、道の両側に江原町の鉄砲組長屋を配して、そのはずれに木戸を設け、角来坂を過ぎて鹿島橋を渡るようになっていました。

また、この地で佐倉藩の医学史の中で画期的なことが行われました。それは、天保14年（1843）に佐倉藩医で蘭方医であった鍋木仙庵らによって、刑死者の腑分け（解剖）が行われたことです。このような解剖が行われたのは佐倉藩では初めてのことであり、全国的に見ても早い時期のものと考えられます。







## えばらだいせいせき 江原台遺跡



江原台遺跡は、印旛沼を北に望む海拔28mの台地上に広がっています。明治26年(1893)には東京帝国大学人類学教室の八木柴三郎によって紹介されており、市内で最も早く認識された遺跡です。

現在の佐倉市健康管理センター周辺の土地区画整理や国立佐倉病院の建設に先立ち、昭和50年代に佐倉市教育委員会及び財団法人千葉県文化財センターによって断続して発掘調査が行われました。その結果、竪穴式住居跡など多数の遺構と多量の遺物が検出され、縄文時代中～晩期、弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代の集落跡が発見されました。

縄文時代では、中期の有孔鏝付注口土器、後期の山形土偶や異形台付土器、晩期の亀形土製品が出土しています。

弥生時代後期の集落では、3基の炉を備えた大型住居跡が検出され、共同施設として利用されていたと考えられます。

奈良・平安時代では、多数の墨書土器が出土しました。中でも土師器杯表面に人の顔が描かれた人面墨書土器は県内でも類例が少数です。

## 成田山参詣と成田道

江戸時代、成田山新勝寺への人々の参詣が盛んになりました。そのため、従来「佐倉道」と呼ばれていた街道が、いつしか「成田道」という名で人々に浸透していきました。現在でも、成田道沿いの道標が各地に残っています。

成田山信仰が盛んになったのは、歌舞伎の人気役者初代市川團十郎が、自分の屋号を「成田屋」とするほどに成田山新勝寺を信仰したことから、彼をひきずる人々にもその信仰が伝わったからだと考えられます。

「成田道」は人々の信仰の道として、また、江戸と佐倉、成田を結ぶ道として重要であり、多くの人々の往来でにぎわいました。



## 佐倉の昔話①

### たんたん山

六崎の若宮の坂のすぐ上、葦原に清水の流れ出ているあたりは、俗に「たんたん山」と呼ばれている。なんともおもしろい名前であろうか。

この名「たんたん山」の由来はこうである。

むかしむかしこの山の上に、六崎六郎という武士が住んでいた。大変立派なお屋敷の大きな門は、あけたてするたびに「ギーツ」と音をたてる。付近の農民はこの音を合図に働いた。門の開く音をきくと、朝食を食べて田畑に行き、夕方には、この音で仕事をやめて夕餉の支度にとりかかるのだそうだ。

武士の屋敷のことだから、農民はほとんどいったことなどないが、そこには清水が噴水のように湧き出て、やがて滝のように落ちて田んぼに流れていた。その流れは「たんたん」と流れていたのので、だれ言うとなく「たんたん山」と呼ぶようになったという。そのあたりには今もお、小さな清水が流れている。

ちなみに六崎六郎は、千葉系図によれば、ちば常胤の孫胤朝、六崎六郎と称してここに住まい、六崎氏の祖となったが、その子は六崎兵衛尉、孫は六崎兵衛太郎と称したという。

胤朝の叔父日胤が三井寺におり、律静房と称しながら以仁王の軍に従い、自ら6人の敵兵を殺し、遂に光明山で戦死したのが治承4年(1180)であるから、六崎氏がここに住んでいたのは、やはり鎌倉初期であろうか。



(佐倉市史編さん委員会発行「たんたん山」より)

## 佐倉の昔話②

### 流れる仏



立派な仏像はよく流れるようだ。

室町期の作で、県下の金剛力士像としては屈指のものといわれる岩名仁王尊は、鹿島川を流れ下り、岩名川岸に漂着したという。近郷の人々がこれを引き揚げようとしたが、仏体は重く、どうしてもあがらないが、岩名の人だけは軽々と運ぶことができた。これは、岩名に鎮まりたいという意味であろうと、村人は天神前の堂標に安置したものとされている。鑄木周徳院の薬師仏は秘仏であるが、その脇に並ぶ日光・月光の両菩薩は、室町期の特色を十分に備え、しかもふつくらとした愛らしい、全く慈悲深い日光・月光らしいものであるが、これも、昔、奥羽の藤原秀衡の守り本尊であったものが、寺崎川の中から投網にかかって出てきたものといわれている。また、寺崎密蔵院の薬師如来も300年前、明正天皇のころ、堂下を流れる鹿島川の薬師堂淵に漂着したもので、靈光燦然と輝き、村人は驚いて今の地に小堂を立てて祭ったものだという。

また、海隣寺御本尊もそうだ。これは海上月越如来と呼ばれ、千葉常胤が、家士を率い、治承3年(1179)7月26日、海辺に月を見ていたが、おりしも海上に異光を放つを見て、網をうってすくわせると、見事な金色の阿弥陀如来を得た。これを「海上月越如来」と名づけ、文治3年(1187)馬加の地に一寺を建立、本尊として安置したといい、臼井光勝寺の閻魔大王も、その御首は印旛沼に流れ出たものであるという。

特におもしろいのは、岩名仁王尊である。その流れ下った鹿島川の上流の岩富では、これを流したと伝えているからである。

いずれにしろ、流れる仏は排仏思想の影響であろうし、それが靈光燦然と輝いたり、その地の人のみか簡単に持ちあげたりするのはやはり仏威仏力を承認することからきているものであろう。

(佐倉市史編さん委員会発行「たんたん山」より)